

特集のことば

# スピリチュアリティと幸福

芝野 松次郎\*

藤井 美和\*

激化するテロリズム、さまざまな格差の拡大、弱者への虐待、広範囲な異常気象などなど、近年の国内外における現象は、私たちのところに深く浸透するダメージを与え、とらえどころのない不安を抱かせることとなっている。また、治癒しない病気、重い障がい、加齢に伴う変化、これらもまた私たちに生の意味、死の意味を問いかけている。そして、その答えを求めようとする私たちの思いがスピリチュアリティへの関心を高めている。スピリチュアリティは、生きる意味を見出し、不安や困難を乗り越える力として、私たちの幸福（well-being）にとって、あるいは私たちの健康にとって不可欠で重要な要素として認識されるようになっているのである。

しかし、スピリチュアリティとは何なのか。構成概念としてのスピリチュアリティは、一筋縄では捉えきれないところの現象であり、社会的、物理的状況の変化と密接に関係するものであるかもしれない。スピリチュアリティは多くの次元から構成される概念であると思われるが、いくら次元を費やしてもその分散（variance）の一部を説明するに過ぎず、大きな残差（residuals）は説明しきれないものではないのかもしれない。

関西学院大学 21 世紀 COE プログラムは、『『人類の幸福に資する社会調査』の研究』を、多様な文化的背景を受け入れつつ行うことを研究のテーマとしている。本特集では、このテーマと深く関わるが、得体の知れないスピ

\* 関西学院大学

リチュアリティを、多彩な研究者が多様な研究手法と思考を駆使することによって論じ、スピリチュアリティの実像に迫ろうとするものである。

窪寺俊之氏は、「自己喪失とスピリチュアリティ 自己を求めて」において、現代人が抱える精神的問題の根底には自己喪失の問題があるとする。そして、失った自己とスピリチュアリティの関係を明らかにしながら、自己回復にとって、超越性、普遍性、愛という目に見えない新たな秩序としてのスピリチュアリティの重要性を主張している。

木原活信氏の「被虐待児童への真実告知をめぐるスピリチュアルケアとナラティヴ論 『子供である』ことと『子供になる』ことをめぐって」では、虐待等を受けて親子関係が断絶した子供のケアに焦点をあて、スピリチュアルケアをナラティヴ論と融合させて論を展開している。これまでターミナルケアや高齢者を対象として語られ研究されることの多かったスピリチュアリティを、対象者特有のものとするのではなく、その本質を見つめ、限界を超える新しい次元として捉えようとする意欲的な論文となっている。氏は、親から虐待された、あるいは棄てられた児童が、血縁のない里親や養親の「本当の子供」になるナラティヴに注目する。そして、子どもが虐待の事実を受け入れることを援助するプロセスにおいてスピリチュアルケアの重要性と可能性を見出そうとする。

林貴啓氏の「『問いのスピリチュアリティ』から幸福を問う」は、スピリチュアリティを「問い」と「答え」の位相に区分し、「問いのスピリチュアリティ」に立って論述する。スピリチュアリティを人生の究極の意味・目的についての「問い」として理解し、「身体・心理・社会的なもの」という次元で考えられてきた「幸福」というものを問い直している。そして、この「問い直し」を、フランクルの思想をもとに発展させ、そこから「問いのスピリチュアリティ」による、より深い幸福のありようを問うている。

岡本宣雄氏の「要介護高齢者におけるスピリチュアルニーズに関する研究 特別養護老人ホーム入居者の意味探求ニーズ」とエルスマリー・アンベッケン氏の“On The Need to Address Spirituality and Well-being in Later Life Care Some Reflections”では、スピリチュアリティと高齢者介護のあり

方が、前者は質的事例研究によって、後者は量的研究と質的研究の組み合わせによって検討される。岡本氏は、人は様々な生活の場面で、スピリチュアルペインとしての「意味の喪失」「実存的空虚感」を経験するが、そこから、失われた生きる意味や目的をあらたに見つけ出そうとする意味探求ニーズが生まれるとする。特別養護老人ホーム入居者の事例調査の結果から、介護福祉施設の高齢者もスピリチュアルペインを抱き、自己超越したものとの関係、結合のなかで、人生の意味の実現に向けた意味探求ニーズの充足を図ろうとしていることを明らかにし、高齢者介護施設におけるケアのあり方を論じている。

アンベッケン氏は、高齢者のケアにおいてスピリチュアリティは重要なのかという問いに対して、数年前に行われた量的調査と、それをリフレッシュし補足するために行ったケア提供者に対する聞き取り調査の結果から分析し、ケアの捉え方、提供の仕方を検討している。生きる意味の探求、意味のある生の探求はすべてのライフステージにおいて行われ、晩年期においても人のこうしたニーズを満たすように援助する必要性を示している。

中西尋子氏は、「神と霊界への信仰 統一教会における合同結婚式参加者たちの結婚生活」において、統一教会（世界基督教統一神霊協会）の合同結婚式で韓国人男性と結婚し、韓国農村部に暮らす日本人女性たちへの聞き取り調査をもとに、なぜ彼女たちが合同結婚式を受け入れ、韓国での結婚生活を継続できたのかを明らかにしようとする。氏は、マインドコントロール論だけでは捉えられない入信の背景を探り、その試みを通して、宗教嫌い、あるいは宗教に無関心だった者が、入信、合同結婚式の受け入れ、結婚生活の継続を可能としているものは、統一教会の教えの実践がスピリチュアリティへの関心を満たすところにあるとする。統一教会脱会者や統一教会に対する批判的データからの調査はあるものの、韓国での現役信者への調査はこれまでなされていないことから意欲的論文である。

大村英昭氏の『脱ヒューマニズム』時代のスピリチュアリティ 『特定宗教』と『拡散宗教』のディレンマ』では、氏独自の理論の展開が興味深い。氏は、宗教性（religiosity と spirituality）に注目し、特定宗教に対する

概念として拡散宗教をあげ、これをキーワードに、一般の人たちの中にある宗教意識、宗教的感性（spirituality）に迫っている。そして、生活様式によって規定される潜在的集合意識によって宗教感情が変化しつつあることを主張する。その上で日米に類似の宗教行動について分析し、類似して見えるものであってもアメリカのそれは特定宗教の影響による religiosity であり、特定宗教の影響の大きさが宗教的感性を意識できないものになっている（post-humanism へ展開していかない）と結んでいる。

このように、本特集に収められた7編の論文はいずれも、スピリチュアリティの実像に迫ろうとする一見無謀とも思える編集者の試みに対して、真摯に応じていただいた結果としての意欲的な著作である。本特集の試みの成果については、読者自身の評価に委ねたい。